
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03185 5000

アララギ叢書目次



大正九年十二月廿九日印刷
大正十年一月一日發行
大正十四年四月十五日八版

著者檢印



（歌集あらたま）
定價金貳圓六拾錢

著作者　齋藤茂吉
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田利彦
東京市小石川區久堅町一〇八番地

印刷者　上村新輔
東京市小石川區久堅町一〇八番地

印刷所　株式會社博文館印刷所
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所　春陽堂
電話本局五十一番
振替東京一六一一七

【圖書目錄進呈】……往復葉書御申越次第　春陽堂

以上のやうな雜記をこの歌集の後に附けるのは恥かしくて氣が引けたけれども、どどのつまりやはり附けることにした。不滿足な歌集でも纏めるのに長い間かかり、今度の病氣とも關聯してゐるので、やはり後日の覺えのために附けておかうと思つた。大正九年にはいろいろ優れた歌集が發行された。そして同人の著では、島木赤彦君の「氷魚」が新たに出、中村憲吉君の「林泉集」が再版になり、先師伊藤左千夫先生の「左千夫歌集」も全集の第一卷として出た。編輯に長く手間どつた古泉千樫君の「屋上の土」もそのうち發行になる筈である。そのほか友人の歌集で近々發行になるのが二三ある。僕の哀れな歌集がそれらの歌集と道づれになることの出來たのを僕は多幸だとおもふし、そして僕の「あらたま」もどうか賣れて吳れればいいとおもふ。神神よ、僕の歌集を護りたまへ。十月三十日長崎にて齋藤茂吉謹み記す。

西洋人にまじつて砂濱で午後の日光を浴びながら少し英語を使つてみたりした。小濱は豊かな温泉場である。それゆゑ僕は二十日に小濱を去つて、佐賀縣藤津郡嬉野温泉に行つた。山にも野にもすでに露じもが繁く降つて、稲を苅つたあとの田を牛が鋤返してゐたり、むかうの峡間の道を小學兒童の走るのが見えたりした。鹿島町を通つて祐徳稲荷神社に參拜した。廿六日は大安吉日だから、朝はやく嬉野を立つて長崎に歸つた。歸つてみると、春陽堂から「あらたま」の校正刷と、古泉千樫君から「左千夫全集」二冊とが屆いてゐた。僕はつつましい心になつて、「あらたま」の校正をし、かたはら色々書物の體裁上の註文などを書いたり、繪模樣の事に就いて百穂畫伯に頼んだりした。今は咽から血も出なくなつた。僕のあの病に心から同情された多くの友に、深い深い感謝の念を捧げながら、この處の文章を僕は書いてゐる。さうして「あらたま」の發行ももう間もないことであらう。僕の此のあはれなる歌集に幸ひたまへ。十月廿八日。

當時の僕の外面生活は極めて平板に見えてゐても、內面にはいろいろな動搖波瀾があつた。そのありさまが此の歌集一卷にまざまざと出てゐる。それゆゑ、この過去つた內面生活の記念に對ふとき、一首でも忽卒には讀過し難い。かう思ふ事がせめてもの僕の慰安になる。以上十月八日長崎にて。

十月三日に、すべてに感謝したき心持で、古湯を立つた。長崎に歸つて來て諏訪神社に參拜した。それから「あらたま」の原稿一切を纏めて春陽堂の小峯氏宛送つて、十一日の朝、西彼杵郡西浦上村の奧の山間にある木場鄕六枚板に行つた、晝は山を越えて天主教徒の墓に詣でたり、夜は洋燈を吊つて山家集を讀んだりした。靜寂の氣が全身に染みわたつて夜半にしばしば目が覺めた。僕は魚が食ひたくなつて、十五日に南高來郡小濱溫泉に行つた。そこで鯛などを食べて、

はりに只深い深い寂しさが心を領してゐる。その間に人知れぬ煩悶もあつたのであるが、今ではそんな心の張りも無くなつてゐる。編輯の長引いたのは、途中で自分の歌を見るのが厭になつたからで、思出したやうに雜誌の切拔などをひろげて纏めかかると、數首讀んでゆくうちにもう厭になる　厭で溜まらぬから改作しようとすると到底思ふやうに行かない。そこで放擲してしまふ。手を着けては中止し中止してゐたのが、このたび病になつて山中に轉地したために、一週間ばかり毎日少しづつ爲事をして、どうにか纏めてしまつた。桂園一枝拾遺の序を讀むと、『嚮に桂園一枝世にあらはれし頃師の大人悔い歎きてのたまへらく、今十年ばかりの齡をえてよみ試みたらましかばと』云々と書いてある。景樹が桂園一枝を刊行したときに云つたといふ景樹の言葉は、景樹の眞實のこゑであつたのであらう。けれども、桂園一枝は當時の歌壇を風靡した歌集である。幽かな歌集を抱いて歎いてゐる僕とは比べものにならぬであらう。

のを東雲堂の西村陽吉君の骨折で田中製版印刷所で印刷に附した。木下杢太郎氏の「五月末」は繪葉書にして僕に呉れたのを伊上凡骨氏に依頼して刷つてもらつた。そのことで數回新宿のずつと先きの方に居る伊上氏を訪れたことなどが今想出される。共に大正五年六年の頃である。それから表紙のことでいろいろ紙店を訪れたりしたが、戰爭の影響で思はしいものは皆品切であつたことなどが今思ひ出される。

さういふことをいろいろ思出してくると、「あらたま」の編輯にまだ手を著けない前は、「あらたま」の發行に就てなかなか氣乘がしてゐたことが分かる。優れた歌集になるやうなつもりで居たのである。然るにいよいよ編輯をはじめてからは、刻々にその希望が破壞されて行つて、編輯の了つた今では、希望のか

に、記憶の中で浄められて、周圍から浮き上がつて、光の强い力の大きいものになつてゐる』るといふのがあつた。又、『まだ璞（あらたま）の儘でつた。親が子を見ても老人が若いものを見ても、美しいものは美しい。そして美しいものが人の心を和げる威力の下には、親だつて老人だつて屈せずにはゐられない』といふのもあつた。僕は自分の歌集が佳い內容を有つてゐることを其の名が何となし指示してゐるやうな氣がして秘かに喜んでゐた。そして萬葉集では、あらたまを、麁玉、荒珠、荒玉、未玉、荒田麻、荒璞とも書いてゐることを調べたりした。

それから、挿繪なども自分で豫め用意しておくのが樂しみであつた。正岡子規先生の「藤娘の圖」は、蕨桐軒君の手から松本の某氏の手に渡つたのを、平瀨泣崖君を介して借りて、日能製版印刷所で三色版にした。それは大正四年の春頃である。平福百穗畫伯の「七面鳥圖」は大正三年の文部省美術展覽會に出品されたもので、所有者渡邊草童君が態々寫眞師を小田原から呼んで寫して呉れた

つても、僕の骨折つた表現や看方が、何かの形となつて歌境の中に滅びずにゐるやうな氣がしてならない。これも亦せめてもの慰安である。以上十月五日長崎にて記。

この「あらたま」を編むに、大正二年九月から大正六年十二月に至るまでに作つた短歌から七百五十首を採つて收めた。僕の第一歌集「赤光」を編んだ時、自分の歌の不滿足なのをひどく悲しんで、どうしようかと思つた。それでも「赤光」を發行してしまふと、「赤光」以後の歌は僕の本物のやうな氣がして、第二歌集には今度こそいい歌を載せられるといふ一種の希望が僕の心にあつたのである。そこで未だ發行もしない第二歌集に「あらたま」などと名を付けて、ひとり秘かに嬉しがつてゐた。森鷗外先生の文章に、『次第に僕から玉(あらたま)が出來るやう

て、どういふところを主に改めてゐるかと云ふに、『ぼつかりと』『生一本の風』『火炎』『ひゆうひゆう』『原つぱ』などの言葉を改めて居る。かういふ音便や漢語やを織り交ぜた、一種促迫して強く跳れ返るやうな言葉は、作つた頃には新しくもあり珍らしくもあつたのであるが、直ぐ飽いたものと見える。『幽かに來るも』といふやうな四三調の結句も既に大正六年頃に飽いてしまつて居る。僕の現在の考から看ても、無論到底氣に入る訣に行かぬが、直した方の歌が相待上氣に入つてゐるから、差當りその方を採つて置いたのである。

徒らに他人の模倣をせず、自力で新機軸を出さうといふのは餘程むづかしいことである。創造力の乏しい僕などが身分不相應に幾分さういふことを企てても、直ぐ厭味に陥つてしまつたのは、陥るところに陥つた感がある。ただ大正三年四年ごろの歌が厭味であつても少し活氣があつて作歌に熱中して居たことが回顧されるから、僕自身にとつてはやはり興味がふかい。また縱ひ失敗に終

ものである。今これらの歌を見ると、大正三年大正四年の作が多い。大正二年から掛けて大正三年四年は、僕の歌が一轉化を來さうとして、いろいろの事をやつて居る。内容も外形も共にさうであるが、今日立つのは重に外形のやうである。さうして是等の變化は、自發的のものが多いが、讀書により繪畫彫刻などを鑑賞したことにより友との交流によつて所動的にもなされてゐる。さういふものは、大正五年にはもうだんだん減じて行つて、大正六年には自作の歌に對しながら既に厭で厭でならなくなつたものである。それゆゑ少しづつ改作してゐるのであるが、改作したのを今見ると却つて惡くなつたのがある。原作には厭味があつても何處か緊張したところがあるので、原作の儘にしようか直さうかと甚く違つた形跡もある。ここに抄した八首の例は改作の重なものであるが、作つた當時には自分でも幾分得意のものであつて人からも褒められたりしたものもある。それが極端に厭になつたりしたのであるから興味がある。そし

(6)
かぜとほろ欅の大樹うづだちて青の火立となりにけるかも　（原作）
かぜむかふ欅太樹の日てり葉の青きうづだちしまし見て居り　（改作）

(7)
ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子幽かに來るも　（原作）
ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子幽かにあゆむ　（改作）
ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子幽かに來つつ　（改作）
ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子むかふ歩めり　（改作）
ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子坂のぼりつつ　（改作）

(8)
はざまなる杉の大樹の木下闇ゆふこがらしは葉おとしやまず　（原作）
はざまなる杉のむらだちの下闇にゆふこがらしは葉おとしやまず　（改作）
はざまなる杉の木立の下闇にゆふこがらしは葉おとしやまず　（改作）
はざまなる杉の大樹の下闇にゆふこがらしは葉おとしやまず　（改作）

これらは、大正六年に「あらたま」を編輯しようとした時に既に改作してあつた

(1)
ぼつかりと朝日子あかく東海の水に生れてゐたりけるかも　（原作）
ゆらゆらと朝日子あかくひむがしの海に生れてゐたりけるかも　（改作）

(2)
いちめんにふくらみ圓し粟ばたけ疾風とほる生一本のかぜ　（原作）
いちめんにふくらみ圓き粟畑を潮ふきあげし疾風とほる　（改作）

(3)
海濱に人出で來りゆふ待ちて海の藥ぐさ火炎に燒きゐる　（原作）
海濱に人出で來りゆふ待ちて海の藥草を火炎に燒きたり　（改作）
いくたりも人出で來りゆふ待ちて海の藥草に火をつけにけり　（改作）

(4)
ひゆうひゆうと細篁をかたむけし風ゆきてなごりふかく澄みつも　（原作）
ひとむきに細篁をかたむけし寒かぜのなごりふかくこもりつ　（改作）

(5)
原つぱに繪をかく男ひとり來て動くけむりを描きにけるかも　（原作）
冬原に繪をかく男ひとり來て動くけむりをゑがきはじめぬ　（改作）
冬原に繪をかく男ひとり來て動くけむりを描きはじめたり　（改作）

自作の不滿足な歌に就て冷然として當時の感動云々等と云つては居られない。自分が作つた歌は自分のものである。棄てるのは痛ましく、その儘では憎くく、そこに愛惜と憎惡からくる煩悶がある。その擧句に僕は改作しようと思つたのである。改作しようと企てた心は、世間に氣兼などをしてゐては成就されない。勇猛の心が必要である。しかし今おもふと、如何に勇猛の心を振つて改作しようとしても、自づから一語一句の改作に止まつてゐた。なるべく原形を存して置きたいといふのは作者の作物に對する愛惜の心に相違ないのである。さもあるべきことで、これは『當時の感動』云々といふやうな理論から來てゐるのでなく、もつと本然のところから來てゐるのであらう。かう自ら云つて、僕は僕の改作の迹を暴露させて見ようと思ふ。縱ひ目敏き少年の徒に批難の材料を與へようとも、僕自身にとつては懷しい思出になるからである。

歌を整理して行つた。その間に數日風を引いて寢たが、それでもやめずに到頭九月三十日にどうにか編輯を了へた。山中のこの浴場も僅かの間にひつそりとして行き、流れる如き月光が峡間を照らしたり、細く冷い雨が終日降つたりした。簇がり立つて咲いてゐた曼珠沙華も凋んで、赭く金づいた栗が僕のゐる部屋の前にも落ちたりした。山の祠の公孫樹の下にはいつか黄色に熟した銀杏が落ちはじめて、毎朝其を拾ふのを樂にしてゐると、ある朝『ギナンヒロコトナラヌ持主稻口熊藏』といふ木の札が公孫樹にぶらさがつてゐたりした。以上十月一日古湯にて記。

4

いつか自作の歌を後で改作して、ある人から批難されたことがあつた。それは僕でも作歌當時の感動を尊重しないことはない。しかし現に面と向つてゐる

3

て長崎に來た。子が來ると一處に遊んでゐて歌集どころではない。そして大正八年も暮れた。大正九年一月九日の夜から流行性感冒に罹つてひどく苦しんだが、病が幸に癒つて學校にも病院にも勤めてゐた。然るに六月一日になつて血を咯いた。談話をも禁じて仰臥してゐたけれども、血痰を咯くことがなかなか止まない。そこで二週間ばかり病院に入院したりした。退院して寂しく寢てゐると、島木赤彦君が遙々見舞に來てくれたので、四人づれで溫泉嶽(うんぜんがたけ)の浴場地に轉地した。そしてかういふ時に「あらたま」でも纏めて見ようと思つてその材料を持つて行つた。しかし手をつけずに八月十四日に長崎に歸つた。それから八月三十日に友と二人で佐賀縣唐津(からつ)海岸に轉地した。九月十一日の朝唐津をおり、僕一人になつて、佐賀縣の南山村古湯(ふるゆ)溫泉に來た。ここへ來て十日目程から痰がだんだん減つて行つて二十三日から血の色が附かなくなつた。その廿三日にはじめて「あらたま」の草稿の入つてゐる風呂敷をあけて、心しづかに少しづつ

拔などを東京に置いたまゝ長崎へ立つた。

大正八年一月に用事あつて東京に歸ると、古泉千樫君の云ふには、早く「あらたま」を纏めないか。そして春陽堂から發行しないか。さういふから、春陽堂の小峰氏にも會つて、「あらたま」の原稿や雜誌の切拔を持つて長崎に來た。さて夏に入つてぼつぼつ纏めようとしたが、その頃不自由な生活をしてゐるのに、夏ぢゆう病院にも休まないで勤めたりなどして、編輯がなかなかはかどらない。それに、いざ清書しようとすると、見る歌も見る歌も不滿で溜まらない。されば とて其を棄ててしまふと、歌の數が減つてしまつて、歌集の體裁を爲さなくなるであらう。それなら、いま歌が直せるかといふに、さういふことはなかなか出來るものでない。落膽と失望とで爲事が中絶した。

それでも時が少し經てば、やはり自分の歌に未練があつた。十月の末ごろから復た纏めにかゝつて十一月半ばごろ大體了へた。十一月の末に妻が子を連れ

あらたま編輯手記

大正六年の夏に、「あらたま」を纏めて見ようと思つて、大正二年、大正三年あたりに作つた歌を清書したりなどした。併しいよいよ歌集にするとなると、雜誌に載せた歌その儘では氣に入らないのがある。例へば、大正三年あたりに作つた漢語や佛典語まじりの歌は、大正六年の夏には既にいろいろ氣に入らなくなつて居た。そこで、少しづつ語句を直したりなどして幾ばくか清書した。そして其の年の十月にしばらく箱根に養生して、家に歸つたら全く纏めてしまはうと思つてゐたところが、急に思ひがけない長崎に來ることになつて、「あらたま」の編輯も放擲しなければならなくなつた。そして、その草稿や雜誌の切

しづかなる港のいろや朝飯のしろく息たつを
食ひつつおもふ

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし
竝みよろふ山

あらたま をはり

長崎のみなとの色に見入るとき遙けくも吾は
來りけるかも

あはれあはれここは肥前の長崎か唐寺の甍に
ふる寒き雨

しらぬひ筑紫の國の長崎にしはぶきにつつ一
夜ねにけり

西ぞらにしづかなる雲たなびきて近江の海は
暮れにけるかも

佐賀驛を汽車すぐるとき灰色の雲さむき山を
しばし目守れり

さむざむとしぐれ來にけり朝鮮に近き空より
しぐれ來ぬらむ

目の前のいらかの上に白霜の降れるを見ればつひに寂しき

ひたぶるに汽車走りつつ富士が根のすでに小きをふりさけにけり

おもおもと雲せまりつつ暮れかかる伊吹連山に雪つもる見ゆ

20 長崎へ

箱根より歸れば、おもひまうけぬ長崎に行くこととなりつ。十一月はじめ一たび東京長崎間を往反す。十二月四日辭令を受く。十七日午前八時五分東京を發し、十八日午後五時五分長崎に着す。

いつしかも寒くなりつつ長崎へわが行かむ日は近づきにけり

271

澄みはてし空の彼方にとほざかる双子の山の
秋のいろはや

さびしさに我のこもりし山川をあつみ清けみ
またかへりみむ

芦の湯に近づきぬらし波だてる高野原の上に
黒き山みゆ

薄波よる高野こえきて山峽はいよいよふかし
我ぞ入りゆく

乙女峠に風さむくして富士が嶺の裾野に響き
砲うつを見つ

ここにして顧りみすれば高山の峯はかくろふ
低山のかげに

ゆふぐれの道は峽間に細りつつ崖のおもより
こほろぎのこゑ

山あざみの花をあはれみ丘貫きて水おち激つ
ほとりにぞ來し

山路をのぼりつめつつむかうにはしろがねの
色に湖ひかりたり

あらそはず行かしめたまへたづさはり吾妻と
しづかに額ふしにけり

いにしへの碓氷峠ののぼり路にわれを恐れて
飛ぶ小鳥あり

267

わたる日の暮れつつゆけば歸るらむ鴉は低し
山峽のそら

この世のものと思へど遙にてこだま相とよむ
谿に來にけり

紺ふかきりんだうの花をあがつまと道に摘み
しが棄てにけるかも

せまりつつ峡間は深し天つ日の白く照りたる
はあはれなるかも

暗谷の流の上を尋めしかばあはれひとところ
谷の明るさ

この深き峡間の底にさにづらふ紅葉ちりつつ
時ゆきぬらむ

しづかなる砂地あはれめりひたぶるに大き石
むれてあらき川原に

さびしみてひとり下り來し山がはの岸の滑岩
ぬれてゐにけり

大石のむらがる峽に入り來つつ心はりつめて
石を見て居り

大き石むらがりにけり山がはのたぎちに近く
うち迫りつつ

石の間に砂をゆるがし湧く水の清しきかなや
我は見つるに

宵ごとに灯ともして白き蛾の飛びすがれるを
殺しけるかな

たたなづく青山の秀に朝日子の美のひかりは
さしそめにけり

湯を浴みて我は眠れりぬば玉の夜のすがらを
鳴れる水おと

こほろぎのほそく鳴きゐる山上を清に照して
月かたぶきぬ

山ゆかば心和ぐやと來しかどもわが胸いたし
もみぢちりつつ

わがこころしまし空しきに暗谷の低空なかを
鳥なき過ぎぬ

打なびく萱くさやまに直向ふ青清山の尾ぬれ
見えずも

261

白なみの立ちてながるる早川の丘べのみちに
われはつかれぬ

乳いろにたたふる霧は狭まれる山のはざまに
動かぬごとし

つかれつつ赤埴路ゆくわがまなかひにすでに
あらはるる襞ふかき山

くろがねの色に照り立つ高山の尾ぬれは深く
谿にしづめり

峯向を人のゆく見ゆしみじみと見ゆる山みち
も照りかげりつつ

あまつ日の光をうけし嚴し山うねりをうちて
山襞くらし

ま澄空にさやかに照れる高山の谿ふかぶかと
陰をつくりぬ

ゆふぐれのをぐらきに入りて谿ぞこに石なげ
うてば谿木精すも

目のもとのふかき峽間は朝霧の滿ちの湛へに
飛ぶ鳥もなし

かみな月十日山べを行きしかば虹あらはれぬ山の峡より

前山はすでにかげるに奥山はいまあかあかと照りにたらずや

おのづから遶りあふ山のながれみづいよいよ細し山ふかみつつ

さやかなる空にか黒き山膚はうねりをうちて
谿にかくろふ

むらぎものみだれしづまらず峽ふかくひとり
こもれど峽の音かなし

やまみづのたぎつ峽間に光さし大き石ただに
むらがり居れり

ちり亂るる峽間の木の葉きぞの夜のあらしの
雨に打たれけるかも

山川の成りのまにまに險しきを踏み通りつつ
狹霧に濡れぬ

たたなはる八峯の上を雲のかげ動くを見れば
心すがしも

さかさまに山のみねよりながれくるさぎりの
渦をまともにか見む

現はるる高山の襞くろぐろとうねりゆきつつ
息づくごとし

ふかきはざまの底ひに立ちて天つ日をかなし
命のままにまにも見む

255

秋ふけし箱根の山をあゆみつつ水のべ來れば
吹く風さむし

われひとり寂しく聞けり山かげに石切る音が
こだまし居るかな

山がはに寒き風ふき大石のむらがれるかげに
ひとりわが居つ

山がはの鳴りのひびきを吾嬬の家さかり來て
聞けばするどし

わが親しみしものぐるひの幾人を心にしぬぶ
山をゆきつつ

いきづめる我が目交にあらはれし鷹の巣山に
天つ日照れり

19 箱根漫吟

大正六年十月九日、渡邊草童、瀨戸佐太郎二君と小田原に會飲す。翌十日ひとり箱根五段に行く。日々浴泉してしづかに生を養ふ。廿一日妻東京より來る。廿六日下山。夜に入り東京青山に歸る。折々に詠み棄てたる歌どもをここに錄す。

ひむがしの海の上の空あかあかとこのやまの
峽間に雨みだれふる

このひごろつかれたりけりあかつきの夢さへ恐れてひとり起きいづ

あわただし明暮夜のめぐりさへ言問はぬかなや青き馬追

いそぎ嘶く馬追がねやめざめゐて心さびしめるわれもこそきけ

あかときはいまだをぐらしさむざむとわがまぢかくに馬追なけり

あかつきの馬追ききつ悔しみてひとりめざめゐる心ゆらぎに

18 馬追

馬追の來啼ける夜となりけりと人に告げざら
むききのさびしさ

馬追はつひに來啼けりさ庭べの草むらなかに
雨ふるおとす

うつうつと暑さいきるる病室の壁にむかひて
男もだせり

はりつめてことに隨はむわがこころ眞夏八十
日もつひに過ぎなむ

寒蟬は鳴きそめにけりなりはひのしげく明け
くれて幾日か經たる

17 午後

診察をはりて洋服をぬぐひまもむかう病室
の音をわがきく

海山よりとどきしたよりのいくつにも返事せ
ずけふも暮れなむ

夏の日の照りとほりたる街なかをひと往き來れどしづけさあはれ

午後の陽の照りのしづまり停電の電車は一つ坂うへに見ゆ

停電の街の日でりを行きもどる撒水ぐるまの音のさびしさ

16　停電

晩夏のひかりしみとほる見附したむきむきに電車停電し居り

しづかなる午後の日ざかりを行きし牛坂のなかばを今しあゆめる

夜ふけて久しとおもふにわが臥せる室のそと
道をとほる人あり

兵營のねむりの喇叭しとしとと降り居る雨の
なかよりきこゆ

汗ばみて室にすわれり一しきり墓地下とほる
電車きこえぬ

跳ねてこし黒き蛼ひとめみむ時の間もあらめ
はじきとばせり

うらさびしき女にあひて手の甲の靜脈まもる
朝のひととき

おもおもと曇りて暑き坂下に竝みてたたずむ
鐵はこぶうま

15日　日

いらだたしもよ朝の電車に乗りあへるひとの
ことごと罪なきごとし

晩夏のひかりしみ入れり目のまへの石垣面の
しろき大石

ものさびしく室に居りつつみちのくの溫泉街
の弟おもへり

味噌汁をはこぶ男のうしろより默してわれは
病室に入る

晩夏の月あかき夜に墓地あひの細きとほりを
行きて歸るも

馬追は庭に來鳴けり心ぐし溜りし爲事いまだ
はたさず

さるすべりの木の下かげにをさなごの茂太を
率つつ蟻をころせり

電燈の光とどかぬ宵やみのひくき空より蛾は
とびて來つ

14 晩夏

日日にあわただし・さのつのりきて晩夏の街を
われは急げり

むらぎもの心はりつめしましくは幻覺をもつ
をとこにたいす

こうこうと南風ふく窓のべにをさなご立たせ
雛ゆくを見しむ

目のさきの甍のうへを跳ねあゆむ鴉を見れば
大きかるかも

狂院の病室が見ゆつり垂れしひくき電燈にち
かよる人がほ

みちのくの病みふす友に書かくとしばし心を
落つけにけり

街に來て人だかりさへ見むは憂し心さびしく
なりにけるかも

墓はらを徒歩兵隊の越えゆきてしばらく人の
見えぬさびしさ

13　漫　吟

汗あえて洋服を著むわづかなる時のひまさへ
つまを叱れり

をさなごはつひに歩めりさ庭べの土ふましめ
てかなしむわれは

235

室にゐて汗あえにつつ古き手紙ふるき葉書を
整理し時經し

病室の亞鉛の屋根を塗りかふる男のうしろを
しまし見てをり

うすじめる書（ふみ）もちいだしさ庭（には）べの隅（すみ）のひかゝ
に書（ふみ）なめて干（ほ）す

くもりぞら電（でん）柱（ちう）のいただきにともりたる光（ひかり）は
赤（あか）く晝（ひる）すぎにけり

ひる過（す）ぎて空（そら）くもりつつ道（みち）のべの電（でん）燈（とう）あかく
わが室（へや）ゆ見（み）ゆ

知れる人たづねても來ずうすぐもる午後のさ
庭に書を干し居り

いちじろくあらはれし大き日暈はくもりいよ
いよふかく消につつ

みなみかぜ空吹くなべにあまつ日をめぐりて
立てる虹のいろかも

12 日暈

をさなごは疊のうへに立ちて居りこの稚兒は
立ちそめにけり

へやに歸り何もせず居りにはとりの長鳴鳥が
きほひ鳴くはや

ひとときの梅雨の晴間にさ庭べの軍鶏の羽ば
たき見てゐるわれは

硝子ごしむかひに見ゆる栗の木の栗の白花す
ぎにけるかも

まむかひの墓原なかにいつしかも白き墓ひと
つ見えそめにけり

窓のべにいとけなき子を立たしめてわが向つ
への森を見てをり

心こめし爲事をへつつ眞夏日のかがよふ甍み
らくしよしも

うすぐらき病室に來て物言ふ時わが額のへに
汗いでにけり

11 曇り空

くもり空にうすき煙の立ちのぼる夕かたまけて子の音もせず

鳳仙花いまだ小さくさみだれのしきふる庭の隅にそよげり

むらぎもの心くるへるをとこらの湯浴むる響
しましし聴き居り

悔いごころあはあはしかり晝つかた外面みな
ぎり雨のふるおと

ものこほしく夕さりにけり歸るらむ徒歩兵隊
の墓地こゆるみゆ

診察を今しをはりてあが室のうすくらがりにすわりけるかも

おのづから心足らはずひたぶるにむづかり泣く子を立ちて見に來し

さみだれのふる音きこゆうすぐらき室ぬちにゐて心やすらふ

10 室にて

うつうつと空は曇れり風ひけるをさなご守り
て外に行かしめず
墓原のかげよりおこる銃のおとわが向つへの
窓にこだます

かりそめに病(や)みつつ居(を)ればほそほそし女(をみな)のこゑも沁(し)みにけるかも

こもらへば裏町(うら)(まち)どほりの遠(をち)近(こち)に疊(たゝみ)をたたく音(おと)のさびしさ

窓(まど)したをののしりあひて通(とほ)りをる埃(ごみ)あつめぐるま窓(まど)にひびけり

朝はやく街にいで來てあわただし毛拔を一つ
もとめてかへる

夏ちかき空はかがよふ朝ながらいそげる我の
額に汗わく

ものぐるひの診察に手間どりてすでに冷たき
朝飯を食む

かかる日(ひ)にひと來(こ)ずもがなこもりゐて己心(おのれごゝろ)の
ゆらぎをぞ見(み)む

をさなごの遊(あそ)ぶを見(み)ればおのづから疊(たゝみ)ねぶり
をり何(なに)かいひつつ

うちわたす墓(はか)はら中(なか)にとりよろふ青(あを)葉(は)のしづ
けさ朝(あさ)のひかりに

かりそめの病に籠りをさなごを我がかたはら
に遊ばせにけり

をさなごの去りたるあとに散らばれるものを
見つめてしまし我が居り

目の前の屋根瓦より照りかへす初夏のひかり
も心がなしも

9 初夏

もの投げてこゑをあげたるをさなごをこころ
虚しくわれは見がたし

ひたぶるにあそぶをさなごの額より汗いでに
けり夏は來向ふ

さみだれの音たてて降るさ庭べをわが稚兒に見しむる朝や

しづかなる夜に入りにけり悲しかるおのが心をひとり目守らむ

をさなごの音もこそせねかかる夜に罪悔しめる人をおもはむ

墓地に來て椎の落葉を聽くときぞ音のさびしき夏は來むかふ

夏にいる椎の落葉のおと聽けば時雨に似たる音のさびしさ

眞日おちていまだあかるき墓はらに青葉のにほひを我はかなしむ

わがそばにいとけなき兒を遊ばせてつくづく
と見つ直にあそぶを

墓地かげより響きくる銃の音さへや心にとめ
ていまぞききける

このあさけ墓原かげの兵營のいらかひかれり
夏來るらし

かりそめに病みつつをれば熱高くおとろへし
君をけふもしぬびつ

水穂に與ふ五首

君がつまのたよりよみつつ熱落ちし君を思へ
り晝床のへに

つげてこし文をよみつつおとろへて室あゆみ
をる君をしぬびつ

このゆふべわがさ庭べに男來て石炭の殼すて
て去りたり

過ぎし日のことをかすかに悔いながら春いま
だ寒き墓地をもとほる

さるすべりの細きはだか木むらだちて墓をめ
ぐれりもとほりくれば

8 折にふれ

電燈をひくくおろして讀む文字のかすかになりて疲れけるかも

むらぎもの心なごみてをさなごの直に遊ぶにまじはりにけり

ひさびさに縁に立ちつつさ庭べの土をし見れ
ばただ乾きたる

鳴り傳ふ春いかづちの音さへや心燃えたたむ
おとにあらずも

こもりつつ百日を經たりしみじみと十年ぶり
の思をあがする

この日ごろ空しく經つつ戀しかるものを尋ね
む心さへなし

火曜日の午後のひととき湯を浴みに行かむと
おもふ心おこりぬ

をさなごの咳のおとを氣にしつつ夜の小床に
目をあきてをり

ひろはらの塵をあげくる寒き風玻璃窓に吹きて心いらただし

この朝け玻璃戸ひらきてうちわたす墓原見ればば木々ぞうごける

すわり居る吾の周圍におのづから溜まりくるものの除らむともせず

おのづから顱頂禿げくる寂しさも君に告げなく明けくれにけり

けふ一日煙草をのまず尊かることとせしごとくまなこつぶりぬ

この日頃ひとり籠りゐ食む飯も二食となりて足らふ寂しさ

をさなごの頭を見ればことわりに争ひかねて
かなしかりけり

七とせの勤務をやめて獨居るわれのこころに
嶮しさもなし

こがらしの吹く音きこゆ兒を守りて寒き街に
われ行かざらむ

7 獨居

腹ばひになりてもの書く癖つきしこの日ごろ
われに人な來りそ

つくづくと百日こもればいきどほる心も今は
起らざるらし

馬なめてとどろとゆかす大王の御行をまもる
のびあがりつつ

病む友の枕べに來ぬよみがへるいきどほろし
き心にあらず

このゆふべ砲工廠のひとすみにくれなゐの旗
ひるがへるなり

6

三月三十日

もの戀しく家をいでたりしづかなるけふ朝空
のひむがし曇る

赤坂の見付を行きつ目のまへに森こそせまれ
ゆらぐ朝森

あらはれむことは悲しもたまきはるいのちのうちに我はいふべし

萱草を見ればうつくしはつはつに芽ぐみそめたるこの小草あはれ

をさなごは眠りてゐたりしまらくはねむれとおもふわがひたごころ

ひむがしの空よりつたふ春の日の白き光にも
馴れし寂しさ

おのづからねむりもよふすひるごもり障子の
やれに風ふきひびく

光る日の嚴くしさにも馴れくれば疑はずけり
春の日のぼる

5 春光

春(はる)の陽(ひ)は空(そら)よりわたるひとりゐて心(こころ)寂(さび)しめば
くらきがごとし

むらぎものゆらぎ怺(こら)へてあたたかき飯(いひ)食(に)みに
けりものもいはなく

ほそりつつ心ふるふらしこの日ごろ人の來る
をおそれてこもる

うち競ふ心もわかず祕かなるかなしみごとも
なくなりにけり

街にいでて酒にゑへども何なれや水撒くるま
にもをののくこのごろ

告げやらむ事はありとも食む飯の二食にて足
らふこの日頃かなや

墓原をもとほり見れどものこほしものこほし
とふ心にあらず

をみなさへ孩児さへや春陽のわたるを見つつ
目はかがやくに

4 友に

おこたりて百日あけくれ微かなる儚きことも
ありと告げなむ

ひさびさにちまたを行けば塵風の立ちのぼる
さへいたいたしかり

七とせの勤務をやめて街ゆかず獨りこもれば
晝さへねむし

ひさびさに外にいづれば泥こほり蹄のあとも
心ひきたり

をさなごの頰の凍風をあはれみてまた見にぞ
來しをさな兩頰

かわききりたる直土に氷に凝るひとむら雪を
をさなごも見よ

秩父かぜおろしてきたる街上を牛とほり居り
見すぐしがたし

この日ごろ人を厭へりをさなどの頭を見れば
こころゆらぐを

3 蹄のあと

もの戀しく電車を待てり塵あげて吹きとほる
風のいたく寒しも

をさなごを心にもちて歸りくる初冬のちまた
夕さりにけり

いとまあるわれとおもふないちじろく幽(かす)かに
人(ひと)の死(し)にゆくを見(み)つ

あつぶすまかつぎてぬれどわがこころ疲(つか)れや
しけむねむりがたしも

なりはひのしげく生(い)くればあはれなる歌(うた)なか
りけりとがむるなゆめ

昨の夜もねむり足はず戸をあけて霜の白きに
おどろきにけり

無沙汰してかなしけれども落ちゐざるこころ
をもちてけふも暮るるを

よるふけて雞なくにいまだ寝ず電車のおとも
なくなりにけり

2 赤彦に酬ゆ

なまけつつ居りと思ふな明暮をい往き還らひ
その夜ねむるに

悲しさを歌ひあげむと思へども茂太を見れば
こころ和むに

まながひに立ちくる君のおもかげの眼つぶらなる現身にあはれ

息ありてのこれる我等けふつどひ君がかなしきいのち偲びつ

夜おそく青山どほりかへり來て解熱のくすり買ふも寂しき

息たえて炎に燒けしものながらまもりて歸る
汽車のとどろき

赤き火に燒けのこりたる君の骨はるばる歸る
父母の國に

君の骨箱にはひりて鳥がなく東のくにに埋め
られにけり

山がひのうつろふ木々のそよぎにも清し光を
君見けむもの

生きたしとむさぼり思ふな天つ日の落ちなむ
ときに草を染むるを

しらぬひ筑紫を戀ひて行きしかど濱風さむみ
咽に沁みけむ

こころ凝りていのち生きむと山川を海洋をこえて行きし君はや

まながひに立ちくる君がおもかげのたまゆらにして消ゆる寂しさ

山がはのこもりてとよむながれにもかなしきいのち君まもりけむ

心(こころ)づまの寫眞(しやしん)を秘(ひ)めてきさらぎのあかつきが
たに死(し)にし君(きみ)はや

おもかげに立(た)ちくる君(きみ)や辛痛(せつな)しとつひに言(い)ひ
けむか寒(さむ)き濱(はま)べに

まをとめをかなしといひて凪(なぎ)さむき筑紫(つくし)の濱(はま)
に君(きみ)死(し)しにけり

一 節忌

二月八日、長塚節三周忌歌會をひらく。 會者、百穗、赤彦、千樫、文明、迢空、重、今衞、茂吉等。 夜ふけて會はてつ。 百穗千樫と三たり青山どほりを歩きてかへる。

おもかげに立ちくる君も今日今夜おぼろなる
かなや時ゆくらむか

大正六年





この夜半にわれにかなしき土のみづつきつめ
てわれ物思はざらむ

音にぶき太鼓をうちて遠火事をふれゆく人に
とほりすがへり

かかる夜にひと怨みむは悲しかりいたき心を
ひとりまもらむ

土ふかくながるる水のこもり音聞すましつつ
夜半に立つかも

ふゆの夜は冴えふけにけりちまた路の底ひゆ
びびく水のさびしさ

187
さ夜なかに地下水道の音きけば行きとどまら
ぬさびしさのおと

夜おそくひとりし來ればちまた路は氷に乾き
たりわれのしはぶき

よるふけて火事を報ずるひとひとり黒外套を
まとひて行けり

冬さむきちまたの夜はふけにけり人まれに行
くおもき靴音

17 寒土

さけさめて夜半に歩めばけたたまし我を追ひ
越す電車のともしび

この日ごろ心は寂しい往くみちかへらふ道の
かぜは寒しも

山をおほひて湧き立つさ霧にわが眼鏡しばしば曇るをぬぐひつつゆく

吾妻山くだりくだりて聞きつるはふもとの森のひぐらしのこゑ

雨はげしきに山をくだれり虹が來て我が傘に幾つもひそむなり

いましめて峽をめぐれりまながひのあかはだ
かなる山に陽の照る

くたびれて息づき居ればはるばると硫黄を負
ひて馬くだるなり

火口よりとほぞきしときあかあかと鋭き山は
あらはれにけり

おきふせる目下むらやま天つ日の照りてかげろふ時のまを見つ

あづまねのみねの石はら眞日てれるけだもの糞に蠅ひとつをり

あづまやまの谿あひくだる硫黄ふく南疾風にむかひてくだる

吾妻峰を狭霧にぬれて登るときつがの木立の
枯れしを見たり

梅干をふふみて見居り山腹におしてせまれる
白雲ぞ疾き

うごきくるさ霧のひまにあしびきの深やま鴉
なづみて飛ばず

五日ふりし雨はるるらし山腹に迫りながるる
吾妻のさ霧

現身の聲あぐるときたたなはる岩代のかたに
山反響すも

山がひにおきな一人ゐ山刀おひて吾妻の山を
みちびきのぼる

山こえて二夜ねむりし瀬上の合歡花のあはれ
をこの朝つげむ

霧こむる吾妻やまはらの硫黄湯に門間春雄と
こもりゐにけり

あまつかぜ吹きのまにまに山上の薄なびきて
雨はれんとす

うらがなしき朝蟬のこゑの透れるをわぎへの
さとに聞きにけるかも

ふるさとの藏の白かべに鳴きそめし蟬も身に
沁む晩夏のひかり

朝じめる瀬上の道をあるき來てあやめの花を
かなしみにけり

老いたまふ父のかたはらにめざめたり朝蜩の
むらがれるころ

けふ一日我をたより來し村びとの病癒ゆがに
藥もりたり

額よりながれし汗に日に燒けし結城哀草果は
わが側に居り

16 故郷。瀬上。吾妻山。

ふる郷に入らむとしつつあかときの板谷峠に
みづをのむかな

みちのくの父にささげむと遙々と薬まもりて
我は來にけり

肉太の君の寫眞を目守るとき汗はしとどに出
でゐたりけり

君が愛でし牛の寫眞のいろ褪せて久しくなり
ぬこのはだら牛

アララギは寂しけれども守るもの身に病なし
うれしとおほせ

15 折にふれ

苦しさに叫びあげけむ故人の古りたる寫眞け
ふ見つるかも

子規忌一首

眞夏日のけふをつどへる九人つつましくして
君をおもへり

左千夫忌四首

卓の下に蚊遣の香を焚きながら人ねむらせむ
処方書きたり

こし方のことをおもひてむらぎもの心騒げど
つひに空しき

ひぐらしはひとつ鳴きしが空も地も暗くなり
つつ二たびは鳴かず

いささかの仕事を終へてこころよし夕餉の蕎
麥をあつらへにけり

土曜日の宿直のこころ獨りゐて煙草をもはら
吸へるひととき

蜩は一とき鳴けり去年ここに聞きけむがごと
こゑのかなしき

14 蜩

橡の樹も今くれかかる曇日の七月八日ひぐらしは鳴く

狂院に宿りに來つつうつうつと汗かきをれば蜩鳴けり

おほほしくさみだれ降るに坂のぼる電車の玻璃に蠅とまりけり

ひたはしる電車のなかにむらぎもの心は空し蠅の飛ぶおと

狂院をはやくまかりて我が乗れる午後の電車のひびきてはしる

13
蠅

ひた走る電車のなかを飛ぶ蠅のおとの寂しさ
しぶくさみだれ

晝すぎて電車のなかの梅雨いきれ人うつり飛
ぶ蠅の大きさ

くもり日の晝も過ぎたるすかんぼの穂のくれ
なゐにこころなげけり

おもおもと空の曇れる晝すぎて岡のぼりつめ
心しづけし

みちのくの我家の里ゆおくり來し蕨を沽でて
けふも食ひけり

かぜむかふ欅太樹の日てり葉の青きうづだち
しまし見て居り

眞日あかく傾きにけり一つ樹のもとに佇ずむ
徒歩兵ひとり

風はやし橡の高樹のをさな葉のもろむきなび
き鴉ちかづく

12 暗綠林

さやぎつつ鴉のむれのかくろへる暗綠の森を
われは見て立つ

うれひつつひとり來りし野のはての暗綠林に
近づく群鳥

ひたぶるに暗黒(あんこく)を飛(と)ぶ蠅(はへ)ひとつ障子(しやうじ)にあたる
音(おと)ぞきこゆる

部屋(へや)なかの闇(やみ)を飛(と)ぶ蠅(はへ)かすかなる戸漏(とも)る光(ひかり)に
むかひて飛(と)びつ

＊ニイチエは"die Welt ist tief"と謂へり

しんしんと夜は暗し蠅の飛びめぐる音のたえ
まのしづけさあはれ

夜は暗し寝てをる我の顔のべを飛びて遠そく
蠅の寂しさ

汗いでてなほ目ざめゐる夜は暗しう(※)つつは深
し蠅の飛ぶおと

墓原にひびきし銃の音たえて電燈のもとに夜ぞふけにける。

階下には女中ねむりぬ階上にわれは書物を片付けて居り

電燈を消せば直くらし蠅ひとつひたぶる飛べる音を聞きける

11 深夜

垢づきし瘋癲學に面よせてしましく讀めば夜
ぞふけにける

煙草のけむり咽に吸ひこみ字書の面つくづく
と見る我をおもへよ

人だかりの中にさびしく我きたり相撲の勝負
まもりつつ居り

夜おそく電車のなかに兵ひとりしづかに居る
は何かさびしき

雨あとのいちごの花の幽かにて咲けるを見れ
ば心なごむも

宵はやく新宿どほり歩き來て蝦蟇のあぶらを
買ひて持ちたり

一夜ふりし雨はれにつつ橡の樹の若葉もろな
びく朝風ぞ吹く

ゆふされば相撲勝負の揭示札ひもじくて見る
初夏のちまたに

10 初夏

梅の木かげのかわける砂に蟻地獄こもるも寂し夏さりにけり

夕疾風けむりをあぐる原とほく車を挽きて兵かへる見ゆ

くやしさに人なげくとき野の青さあまがへる
こそ鳴きやみにけれ

眞日すみて天づたふとき五月野の動きて青し
かへる音にいづ

命あるものの悲しき眞晝間の五月の草に雨蛙
鳴く

さびしさに堪ふるといはばたはやすし命みじ
かし青がへるのこゑ

晝の野にこもりて鳴ける青蛙ほがらにとほる
こゑのさびしさ

青がへる日光のふる晝の野にほがらに鳴けば
ましてかなしき

9 五月野

五月野の浅茅をてらす日のひかり人こそ見えね青がへる鳴く

行きずりに聞くとふものか五月野の青がへるこそかなしかりけれ

さつき野の草のひかりに鳴く蛙こころがなしく空にひびけり

青がへるひかりのなかになくこゑのひびき徹りて草野かなしき

あをあをと五月の眞日の照りかへる草野たまゆら蛙音にいづ

五月野の青きにほひの照るひまや歎かば人ぞ
幽かなりける

五月野の草のなみだちしづまりて光照りしが
あまがへる鳴く

五月の陽てれる草野にうらがなし青蛙ひとつ
鳴きいでにけり

8 雨蛙

あまがへる鳴きこそいづれ照りとほる五月の
小野の青きなかより

かいかいと五月青野に鳴きいづる晝蛙こそあ
はれなりしか

晝眠りありがたしとて眠らむか聞えくる音も
かりそめならず

晝ごもり獨りし寐れど悲しもよ夢を視るもよ
もの殺すゆめ

晝床に電車くだかけうつし身の笑ふもきこゆ
我が晝床に

晝床に眼ひらけばあかあかと玻璃戸のそとを
日のわたる見ゆ

晝床にほのりほのりとゐる我の出で入る息の
おとの幽けさ

わくらはの眠り戀しとあかねさす晝の小床に
目をつむりけり

7 體膚懈怠

ひるながら七日に一日ねむらむと晝の小床に
つかれつつ居り

ひそまりてけふは眠らむおのづから眠り足ら
はば起ちてゆかむか

あまぐもの雷ひくし夜の土にはだらにたまる
雪を目守らむ

ひたぶるにいかづち渡る夜空よりしらじらと
雪ながれ來にけり

ぬば玉の暗き夜ひかりゆく雷の音とほそきて
雪つもりけり

暁にはや近からし目の下につくづくと狂者の
いのち終る

呆けゆきてここは生命の果てどころ死行くを
まもる我し寒しも

ことなくていま暮れかかる二月の夕はぬるし
蟇いでにけり

ふゆさむき瘋癲院の湯あみどに病者ならびて
洗はれにけり

霜いたく降れる朝けの庭こえてなにか怒れる
狂人のこゑ

けふもまた病室に來てうらわかき狂ひをみな
にものをこそ言へ

電車のぼる坂のまがりにつくづくと立坊なら
ぶ日輪に向きて

うつしみの家居を燒くとどろきて走る炎に
家は燒けけり

胸さやぎ今朝とどまらず水もちて阿片丸を呑
みこみにけり

6 折々の歌

むらむらと練兵場を吹きあげし冬朝風のなご
りを見居り

きぞの夜にこほりしままの流泥わか晝ゆゑに
解けがてぬかも

現身は現身ゆゑにこころの痛からむ朝けより
降れるこの春雨や

途中にて電車をくだるひしひしと遣らふ方な
き懺悔をもちて

うつつなるほろびの迅さひとたびは目ざめし
雛もねむりたるらむ

人ごみのなかに入りつつ暫しくは眼を閉ぢむ
このしづかさや

寂しかる命にむかふ土の香の生は無しとぞ我
は思はなくに

あなあはれ寂しき人ゐ浅草のくらき小路にマ
ッチ擦りたり

5 寂土

小野の土にかぎろひ立てり眞日あかく天づた
ふこそ寂しかりけれ

うつしみは悲しきものか一つ樹をひたに寂し
く思ひけるかも

市路には泥をあつむる人をりて腰を延したり
われはなげくも

泥ただよふ十字に電車とまれどもしきりて去
るに感ずるさびしさ

きさらぎのちまたの泥に佇立める馬の兩眼は
またたきにけり

きさらぎの雪消の泥のただよへる街の十字に
人つどひけり

あからひく晝の光のさしながら衢の泥に見ゆ
る足あと

馬ひとつ走りひびきて來るまの墓石店まへに
泥はねかへる

4 春泥

きさらぎのちまたの泥におもおもと石灰ぐるま行くさへさびし

歩兵隊泥ふみすすむ整歩のつらなめて踏む足なみの音

あつまりて酒（さけ）は飲（の）むとも悲（かな）しかる生（いき）のながれを思（おも）はざらむや

つくづくと憂（うれひ）にこもる人（ひと）あらむこのきさらぎの白（しら）梅（うめ）のはな

君（きみ）が息（いき）たえて筑（つく）紫（し）に焼（や）かれしと聞（き）きけむ去（こ）年（ぞ）のこよひおもほゆ

3　長塚節一周忌

うつうつと眠りにしづみ醒めしときかい細る
身の辛痛かりけむ

しらぬひの筑紫のはまの夜さむく命かなしと
しばぶきにけむ

まれまれに衢もとほる目にし染むいかなればかもひとのかなしき

きさらぎの三月にむかふ空きよし銀座つむじに塵たちのぼる

よるおそく家にかへりてひた寒し何か食ひたくおもひてねむる

ひよろ高き外人ひとり時のまに我を追ひ越す
口笛ふきつつ

あわただしく夜の廻診ををはり來て獨り嚏る
も寂しくおもふ

冬の日は照り天傳ふひたぶるに坂のぼる黑馬
の汗のちるかも

2 雑歌

三宅坂をわれはくだれり嘶かぬ裸馬もひとつ
寂しくくだる

薬罐よりたぎる湯をつぎいくたびも我は飲み
居り咽かわくゆゑに

夜の最中すでに過ぎたりけたたまし軍雞の濁ごゑをひとり聞き居り

さむざむと寢むとおもへど一しきり夜のくだかけの長啼くを聽く

夜ふかし寢つかれなくに來しかたのかなしき心よみがへり來も

原のうへに降りて冴えたる雪を吹く夜かぜの
寒さ居るものもなし

さ夜なかと夜はふけにけり冴えこほる雪吹く
風のおとの寂しさ

こほりたる泥のうへ行くわがあゆみ風邪のな
どりの身にしひびけり

1 夜の雪

街かげの原にこほれる夜の雪ふみゆく我の咳
ひびきけり

夜ふけてこの原とほること多しこよひは雪も
こほりけるかも

大正五年

おほははのみ靈のまへに香つぎて稚兒なりし
我をおもへり

この身はもかへらざらめやおほははを火炎に
葬り七夜を經たり

みやこべにおきて來りし受持の狂者おもへば
心いそぐも

十二月作

あしびきの山よりいでてとどろける湯ずゑの
けむりなづみて上らず

炭竈をのぞきて我はあかあかと照り透りたる
炭木を見たり

炭がまに炎のぼらず見ゆるものけむりの渦の
ひまに見ゆるを

山こえて山がひにゆく道の霜おのづからなる
凝りの寒けさ

山がひのあかつきの道いそがねど霜照る坂を
われ越えにけり

たか原に澄みとほりたる湖をはるかに見つつ
峡間に入らむ

15 道の霜

「祖母」其の三

山峡にありのままなる道の霜きえゆくらむか
このしづけさに

つくづくとあかつきに踏む道の霜きぞのよる
ふかく降りにけるかな

あら土の霜の解けゆくはあはれなり稚きときも我は見にしが

ふるさとに歸りてくれば庭隈の鋸屑の上にも霜ふりにけり

夕されば稻かり終へし田のおもに物の音こそなかりけるかも

十一月作

せまりくる寒さに堪へて冬山の山ひだにいま
陽の照るを見つ

きのこ汁くひつつおもふ祖母の乳房にすがり
て我はねむりけむ

稚くてありし日のごと吊柿に陽はあはあはと
差しゐたるかも

冬の山に近づく午後の日のひかり干栗の上に
蠅ならびけり

ちりぢりとゐろりに燃ゆる楢の樹の太根はつ
ひにけむり擧げつも

おほははのつひの命にあはすして霜深き國に
二夜ねむりぬ

棺のまへに蠟の火をつぐ夜さむく一番どりは
鳴きそめにけり

山形の市にひとむれてさやげどもまじはらむ
心われもたなくに

むらぎもの心もしまし落ゐたり落葉のうへを
黒猫はしる

はざまなる杉の大樹の下闇にゆふこがらしは
葉おとしやまず

時雨ふる冬山かげの湯のけむり香に立ち來り
ねむりがたしも

あしびきの山のはざまに幽かなる馬うづまり
て霧たちのぼる

14 こがらし

「祖母」其の二

あしびきの山こがらしの行く寒さ鴉のこゑは
いよよ遠しも

高原にくたびれ居れば山脈は雪にひかりつつ
あらはれ見え來

ここに來て心いたいたしまなかひに迫れる山
に雪つもる見ゆ

いただきは雪かもみだる眞日くれてはざまの
村に人はねむりぬ

山がはのたぎちの響みとどまらぬわぎへの里
に父老いにけり　十一月作

愁へつつ祖母はふる火の渦のしづまり行きて
曉ちかからむ

ふゆの日の今日も暮れたりゐろりべに胡桃を
つぶす獨語いひて

冬の日のかたむき早く櫟原こがらしのなかを
鴉くだれり

土のうへに霜いたく降り露なる玉菜はじけて
人音もなし

おほははのつひの葬り火田の畔に蟀も鳴かぬ
霜夜はふり火

終列車のぼりをはりて葬り火をまもる現身の
しはぶきのおと

ゐろり心にうれへとどまらぬ我がまなこ煙は
かかるその渦けむり

あつぶすま堅きをかつぎねむる夜のしばしば
覺めて悲し霜夜は

日の入のあわただしもよ洋燈つりて心がなし
く納豆を食む

蠟の火のひかりに赤しおほははの棺のうへの
太刀鞘のいろ

朝あけて父のかたはらに食す飯ゆ立つ白氣も
寂しみて食す

さむざむと曉に起き麥飯をおしいただきて食
ひにけり

まなかひにあかはだかなる冬の山しぐれに濡
れてちかづく吾を

いのちをはりて眼をとぢし祖母の足にかすか
なる輝のさびしさ

命たえし祖母のかうべ剃りたまふ父を圍みし
うからの目のなみだ

13 冬の山

「祖母」其の一

おのづからあらはれ迫る冬山にしぐれの雨の降りにけるかも

ものの行とどまらめやも山峡の杉のたいぼくの寒さのひびき

五番町に電車を降りて雨しぶく砂利路ゆけど寂しくもなし

みちのくのわぎへの里にうからやから新米たきて尊みて食む

奉祝歌二首

いやしかるみ民の我も髯そりてけふの生日をあふがざらめや

八月―十一月作

水ぐさの圓葉の照りをあはれめり七月ひるの
おくつきどころ

冬服をはじめて著たる日は寒く雨しとしとと
降りつづきけり

石原純を迎ふ三首

とほく來し友をうれしみ秋さむき銀座の店に
葡萄もちて食む

12 折々の歌

龜戸の普門院にて三年經し伊藤左千夫のおくつきどころ　先師三周忌三首

墓に來て水をかけたり近眼の大き面わの面影に立つ

雨はれて心すがしくなりにけり窓より見ゆる
白木槿のはな

雨はれしのちの疊のうすじめり今とどまりし
汽車立つきこゆ

雨はれしさ庭は暗し幽かにてこほろぎ鳴けば
人もかなしき

七月作

澁谷川うづまき流るたもとほりうづまく水を
見れど飽かぬかも

家むかうの欅のうへにほびこりし雲は光りて
雨ふらむとす

さ庭べに並びて高き向日葵の花雷とどろきて
ふるひけるかも

11 雨後

あさまだき道元坂をくだり來て橋をわたれり
さかまけるみづ

朝川はにごりてながる榧の枝は濡れて垂れり
水にとどかず

松並木の松ふとりつつ傾けり鉛のごとくうみ曇る見ゆ

いばらきの濱街道に眠りゐる洋傘うりを寂しくおもふ。

隆道のなかに牛立つ日のくもりわれ疲れつつ來りけるかも

八月作

くもり日のくぼき砂畑に腰を延す女見にけり
海のなかより

外海にそへる並木路ひたはしる郵便脚夫の體
ちひさし

眉ながき漁師のこゑのふとぶとと泊てたる舟
にものいひにけり

みちのくに近き驛路日はくれて一夜ねむると
ねむりぐすり飲む

平潟へちかづく道に汗は落つ捨身あんぎやの
我ならなくに

いりうみの汐おちかかる曉方の舟の搖れこそ
あはれなりけれ

日焼畑いくつも越えて茎太のこんにやく畑に
われ入りにけり

うらわかき妻はかなしく砂畑の砂はあつしと
言ひにけるかも

みちのくへあが孀をやりて足引の山の赤土道
あれ一人ゆく

10 海濱雜歌

腹(はら)あかき舟(ふね)のならべる濱(はま)の照(て)り妻(つま)もろともに
疲(つか)れけるかも

みちのくの勿(な)來(こそ)へ入(い)らむ山(やま)がひに梅(うめ)干(ぼし)ふふむ
あれとあがつま

すき透り低く燃えたる濱の火にはだか童子は潮にぬれて來

旅を來て大津の濱に晝もゆる火炎のなびき見すぐしかねつ

いばらぎの大津みなとの渚べをい行きもとほり一日わらはす

八月作

六人の漁師が圍みあたりをる眞晝渚の火立の
なびき

くれなゐにひらめく火立を眞晝間の渚の砂に
見らくし悲し

まかがよふ晝のなぎさに燃ゆる火の澄み透る
まのいろの寂しさ

9 渚の火

まかがよふ眞夏なぎさに寄る波の遠白波の走
るたまゆら

眞夏日の海のなぎさに燃えのぼる炎のひびき
海人はかこめり

しんとして直立厚葉ひかりたるあまりりすの
鉢に油蟲のぼる

ぬけいでし太青莖の莖の秀にふくれきりたる
花あまりりす

あまりりす鉢の土より直立ちて厚葉かぐろく
この朝ひかる

七月作

ものぐるひの屍解剖の最中にて溜りかねたる
汗おつるなり

うち默し狂者を解體する窓の外の面にひとり
ふたり麥刈る音す

狂人に親しみてより幾年か人見んは憂き夏さ
りにけり

いそがしく夜の廻診をはり來て狂人もりは
蚊帳を吊るなり

のびのびと蚊帳なかに居てわが體すこし痩せ
ぬと獨語いへり

履のおと宿直室のまへ過ぎてとほくかすかに
なるを聞きつつ

8 漆の木

たらたらと漆の木より漆垂りものいふは憂き
夏さりにけり

ぎばうしゆに愛しき小花むれ咲きて白日光に
照され居たり

ひじろがぬわれの體中は息づけり淺茅の原の
眞晝まの照り

停電の街を歩きて久しかり汗ふきをれば街の
音さびし

墓地かげに機關銃のおとけたたましすなはち
我は汁のみにけり

七月作

7 寂しき夏

眞夏日のひかり澄み果てし淺茅原にそよぎの
音のきこえけるかも

まかがよふ淺茅が原のふかき晝むかうの土に
豚はねむりぬ

尊とかりけりこのよの曉に雉子ひといきに悔
しみ啼けり

大戸よりいろ一樣の著物きてものぐるひの群
外光にいづ

ひさびさにおのづからなる我がこころ呆けし
女にものいひにけり

六月作

朝みづにかたまりひそむかへるごを掻きみだ
せども慰みがたし

こらへゐし我のまなこに涙たまる一つの息の
朝雉のこゑ

朝森にかなしく徹る雉子のこゑ女の連をわれ
おもはざらむ

6　雉子

おたまじやくしこんこんとして聚合れる曉森
の水のべに立つ

宿直してさびしく醒めし目のもとに黒きかへ
るご寄りてうごかず

夜の床に笑ひころげてゐる女わがとほれども
かかはりもなし

馬子ねむり馬は佇む六月の上富坂をつかれて
くだる

たらたらたらと額より垂る汗ふきて大きいのちも
つひに思はず

五月六月作

5 折にふれ

目のまへの電燈の球を見つめたり球ふるひつ
つ地震ゆりかへる

狂人のにほひただよふ長廊下まなこみひらき
我はあゆめる

しづかなる夜半に心の澄み遊ぶいよよ痛きを
人知るらむか

外面にはほそ春雨のふりやまずさ夜ふけてわ
れは目ざめゐにけり

四月作

日を經つつ心落ちゐぬ我ながら今夜しづかにすわりて居らな

この夜半に目ざめたる者のひとり居てむかうの室に咳けるかも

かかる夜半に獨言いふこゑきこゆ寝るに堪へざらむ狂者ひとりふたり

春雨はくだちひそまる夜空より音かすかにて
降りにけるかも

外面には春雨あはれに音しつつさ夜更れども
われは寝なくに

かりそめの病といへど心ほそりさ夜ふけて馬
のおとをこそきけ

春の夜の雨はふりつつ聞こえくる家の小馬の
前搔のおと

しづかなる夜とおもふに現なる馬ちかくゐて
嚔るきこゆ

春雨の音のしながら幽かにてさ夜ふけと夜は
ふけにたるらし

4 春雨

外面には雨のふる音かすかなりこころ静かに
二階をくだる

春雨は降りて幽けしこの夜半に家のかひ馬の
目ざむる音す

朝早く溜まる光にかがやきてえも言はれなき塵をどり居り

かうべを照らす朝日子のつくづくとうづの光に塵をどるみゆ

光には微塵をどりてとどまらず肉眼もちて見るべかりけり

四月作

ありのままねむり目ざめし室中の光たむろに
飛ぶものもなし

ほそほそと女のこゝろす我が室に誰か來るかと
おもひけるかも

うつしみは誰も來ずけり頭より光かむりて眼
あき居り

3 朝

ほがらほがらとひかりあかるき朝の小床に眼
をあきて居りにけり

きぞの夜の戸閉わすれて寢しより朝てる光の
なかに寢てゐつ

幾朝か軍器工廠の境内に霜しろきを見つつ我
は來にけむ

富坂を横にくぐりて溝のみづ砲工廠に入りに
けるかも

機關銃の音のするどき境内をのびあがり見れ
ば土手ふくれ見ゆ

79

あは雪のながれふる夜のさ夜ふけてつま問ふ
君を我は嬉しむ

きぞの夜に足らひ降りけむ春の雪つまが手よ
りてその雪ふます

いばらきの大津みなとに篝火たき泊てたる舟
にをさなごのころ

あが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき
力おもはざらめや　大悲二首

ははそはの母をおもへば假初に生れこしわれ
と豈おもはめや

水のへにかぎろひの立つ春の日の君が心づま
いよよ清しく　新婚賀三首

しづかなる冬木のなかのゆづり葉のにほふ厚
葉に紅のかなしさ

汗たらし朝坂のぼる荷ぐるまの轍おもひきり
霜柱つぶす

けむりのぼる砲工廠の土手のへに薄はしろく
枯れにけるかも

2 雑歌

野のなかの自づから深き赤土ぞここに春さりく
れど霜をむすぶに

日のひかりの隈なきに眠る豚ひとつまなこを
ひらく寂しとぞいはむ

入日さすほそたかむらをそがひにし出で入る
息を愛しみにけり

ひとときを明るく照りしたかむらにこもるし
づかさや夕づきにつつ

愛しめる命をもちて冬の日の染むたかむらに
遠ざかりつも

冬さむき日のちりちりに篁の黄にそよぐこそ
あはれなりけれ

うつし身はかなしきかなや篁の寒きひかりを
見むとし思ふ

ひとむきに細篁をかたむけし寒かせのなごり
ふかくこもりつ

1 小竹林

ひるさむき光しんしんとまぢかくの細竹群に
染みいるを見む

ひとむらとしげる竹むら黄に照りてわれのそ
がひに冬日かたむく

大正四年

大津畫といふもの[illegible]
かきつたへりん彩色を骨とし輪郭を結
ぶする事大方は日本画と違ひ幼稚なる
畫法にあらで写生のと真面目をほせり
今[illegible]（明治五年）[illegible]大津に遊び
其地の土産[illegible]の画五六枚を携へ帰りて
[illegible]筆法[illegible]おとなびて今やきたる
[illegible]絶かぬ地するものかと[illegible]
[illegible]へたるは[illegible]
て



[illegible]畫式といふ極めて稀なる書あり
[illegible]
まにみもて[illegible]不思議[illegible]
[illegible]男畫なから一つ〳〵に趣向あ
り[illegible]の中に[illegible]をなしたるか地して
[illegible]物[illegible]居る

[illegible]畫式



幼童[illegible]古画帖

幼童[illegible]古画帖[illegible]
[illegible]其[illegible]
[illegible]
[illegible]
春[illegible]一日画を[illegible]作る



くれなゐの獅子をかうべにもつ童子もんどり
打ちてあはれなるかも

墓はらをこえて聯隊兵營のゆふ寒空に立てる
虹かも

向うには小竹林の黄の照りのいよよさびしく
日はかたむきぬ

ふゆ原に繪をかく男ひとり來て動くけむりを
かきはじめたり

しぐれふる空の下道身は濡れて縁なきものと
我が思はなくに

ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子
坂のぼりつつ

14 冬日

かんかんと橡の太樹の立てらくを背向にしつつわれぞ歩める

橡の樹のひろ葉みな落ちて鴉ゐる枝のさゆれのよく見ゆるかも

ひさかたのしぐれふりくる空(そら)さびし土(つち)に下(お)り
たちて鴉(からす)は啼(な)くも

しぐれふる峡(かひ)にいりつつうつしみのともしび
見(み)えず馬(うま)のおとすも

現身(うつしみ)はみなねむりたりみ空(そら)より小夜時雨(さよしぐれ)ふる
この寒(さむ)しぐれ

山こえて片山かげの青畑ゆふべしぐれの音の
さびしさ

ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく
降りにけるかも

山ふかく遊行をしたり假初のものとなおもひ
山は邃しも

13 時雨

片山かげに青々として畑あり時雨の雨の降り
にけるかも

山峡に朝なゆふなに人居りてものを言ふこそ
あはれなりけれ

石斧ひそむ畑のなかに草鞋ぬぎ肉刺を撫りて
ひとり居りけり

岨をゆく人に追ひつき水わたる足つめたしと
いひにけるかも

夜おそく風呂のけむりの香をかぎて世にも遠
かる思ひぞわがする

さむざむと秩父の山に入りにけり馬は恐るる山ふかみかも

据風呂のなかにしまらく目を閉ぢてありがたきかなや人の音もせず

苦行者も通りにけらしこの水をいつくし細しといひにけらしも

12 秩父山

ちちのみの秩父の山に時雨ふり峡間ほそ路に
人ぬるる見ゆ

ここにして秩父はざまの溪の水いはに迫りて
白くたぎつも

潮の上に怺へかねたる海豚の子は眼をあきて
命をはれり

かうかうと西吹きあげて海雀あなたふと空に
澄みゐて飛ばず

あがつまと古泉千樫と三人して清きこの濱に
一夜ねにけり

ほくほくとけふも三崎へのぼり馬粟畑こえて
いななきにけり

こんにやくの茎の青斑の太茎をすぽりと抜き
て聲もたてなく

ひたぶるに海豚はふくれて水のうへありのま
まなる命死にゐる

けふもまた急げいそげとのぼり馬とほり過へ
る馬を見て嘶く

旅を來てかすかに心の澄むものは一樹のかげ
の蒟蒻ぐさのたま

しみじみと肉眼もちて見るものは蒟蒻ぐさの
くきの太たち

まるくふくれし煙草ばたけの向う道馬車は小
さく隠ろひにけり

松並樹くろくはるけしなげけとて笠著て旅路
ゆくひとのあり

入日には金のまさごの揺られくる小磯の波に
足をぬらす

日もすがら煙草ばたけに蹲りをみなしづかに
蟲をつぶせり

紺に照る海と海との中やまにみづうみありて
かぎろひのぼる

ぬすみたる煙草の花の一にぎりもち歩き來て
妻にわたせり

11 三崎行

いちめんにふくらみ圓き粟畑を潮ふきあげし
疾かせとほる

あをあをとおもき煙草のひろ葉畑くろき著物
の人かがみつも

いくたりも人いで來りゆふ待ちて海の藥草に火をつけにけり

この濱に家ゐて鱗を食ひしかば命はながくなりにけむかも

海岸にひとりの童子泣きにけりたらちねの母いづくを來らむ

みづゆけば根白高萱かやむらは濡れつつ蟹を
寝しむるところ

しろがねの雨わたつみに輝りけむり漕ぎたみ
遠きふたり舟びと

一列に女かがまりあかあかと煙草葉を翻へす
晝のなぎさに

にちりんは白くちひさし海中に浮びて聲なき
童子のあたま

妻とふたり命まもりて海つべに直つつましく
魚くひにけり

さんごじゆの大樹のうへを行く鴉南なぎさに
低くなりつも

うつつなるわらべ専念あそぶころ巖の陰より
のびあがり見つ

あかあかと照りてあそべる童男におのづから
なる童女も居り

日のもとの入江音なし息づくと見れど音こそ
なかりけるかも

たどり來て煙草ばたけに密ひそと煙草の花を
妻とぬすみぬ

ゆふされば煙草ばたけにかくまれし家念佛す
ひとは見えなく

海此岸に童のころすなりうらうらと照り滿る
光にわれ入らむとす

10 海濱守命

ゆふぐれの海の淺處にぬばたまの黑牛疲れて
洗はれにけり

ゆふ渚ものの言はぬ牛つかれ來てあたまも專ら
洗はれにけり

ゆふづくと南瓜ばたけに漂へるあかき遊光に
礙あらずも

あかあかと土に埋まる大日のなかにひと見ゆ
鍬をかつぎて

眞日おつる陸稲ばたけの向うにもひとりさび
しく農夫かがめり

ありがたや玉蜀黍の實のもろもろもみな紅毛
をいただきにけり

な騷ぎそ此の郊外に眞日落ちて山羊は土掘り
臥しにけるかも

あかあかと南瓜ころがりゐたりけりむかうの
道を農夫はかへる

6 遊光

ふくらめる陸稲ばたけに人はゐずあめなるや
日のひかり澄みつつ

空をかぎりまろくひろごれる青畑をいそぎて
のぼる人ひとり見ゆ

日向葵は諸伏しゐたりひた吹きに疾風ふき過
ぎし方にむかひて

熱いでて臥しつつ思ふかかる日に言よせ妻は
何をいふらむ

嵐やや和ぎ行きにけり床のへに群ぎもさやぎ
熱いでて居り

疾風來と竹のはやしの鳴る音の近くにきこゆ
臥りつつをれば

はつはつに咲きふふみつつあしびきの暴風に
ゆるる百日紅のはな

油蟬いま鳴きにけり大かぜのなごりの著るき
百日紅のはな

8 百日紅

われ起きてあはれといひぬとどろける疾風の
なかに蟬は鳴かざり

家鴨らに食み殘されしダアリアは暴風の中に
伏しにけるかも

ぎばうしゆの葉のひろごりに日ならべし梅雨
晴れて暑しこのごろ

代々木野をむらがり走る汗馬をかなしと思ふ
夏さりにけり

みじかかるこの世を經むとうらがなし女の連
のありといふかも

朝どりの朝立つわれの靴下のやぶれもさびし
夏さりにけり

こころ妻まだうら若く戸をあけて月は紅しと
いひにけるかも

わくらはに生れこしわれと思へども妻なれば
とてあひ寝るらむか

7 朝の螢

足乳根の母に連れられ川越えし田越えしこと
もありにけむもの

草づたふ朝の螢よみじかかるわれのいのちを
死なしむなゆめ

水際にはおたまじやくしの聚合の凝り動かねば夕さりにけり

くろぐろと命みじかく寄りあへるおたまじやくしをしまらくは見む

きちがひの遊歩がへりのむらがりのひとり掌を合す水に向きつつ

あかねさす晝の光の尊くておたまじやくしは
生れやまずけり

まんまんと滿つる光に生れゐるおたまじやく
しの目は見ゆるらむ

かへるごの池いちめんになりたらば術あらめ
やと心散りをり

9 蝌蚪

かへるごは水のもなかに生れいでかなしきか
なや淺岸に寄る

くろきものおたまじやくしは命もち今か生れ
なむもの怖ぢながら

やまたづのむかひの森にさぬつどり雉子啼き
とよむ聲のかなしさ

朝明けてひた怒りをる狂人のこゑをききつつ
疑はずけり

ひとりゐて見つつさびしむあぶらむし硯の水
を舐め止まずけり

5 とのゐ

はつ夏の日の照りわたりたる狂院のせとの土
原に軍鶏むらがれり

ひと夜ねしとのゐの朝の疊はふ蟲をころさす
めざめごころに

あきらめに色なありそとぬば玉の小夜なかに
して目ざめかなしむ

この朝明ひた急ぐ土の土龍かなしきものを我
見たりけり

豚の子と軍雞とものの食ふところなり我が魂も
もとほるところ

朝ゆけば朝森うごき夕くれば夕森うごく見とも悔いめや

しまし我は目をつむりなむ眞日おちて鴉ねむりに行くこゑきこゆ

この夜は鳥獸魚介もしづかなれ未練もちてか行きかく行くわれも

4 諦念

橡の太樹をいま吹きとほる五月かぜ嫩葉たふ
　とく諸向きにけり

朝風の流るるままに橡の樹の嫩葉ひたむきに
　なびき伏すはや

いつぽんの杉の大木に抱かれゐし紅き入つ日
土に入るかも

赤光のなかに染まりて歸りくる農夫のをみな
草負へりけり

なげかざる女のまなこ直さびし電燈のもとに
湯はたぎるなり

にはたづみ流れ果てねば竹の葉ゆ陽炎のぼる
日の光さし

さにづらふ少女の歎もものものし人さびせざ
るこがらしの音

いつぽんの杉の大木にかかりたる入日のほの
ほ澄みにけるかも

侏儒ひとり陣羽織きて行きにけり行方に春の
つちげむり立つ

入日ぞら頭がちなる侏儒ひとりいま大河の鐵
橋わたる

かなしかる初代ぽんたも古妻の舞ふ行く春の
よるのともしび

ほうつとして電車をおりし現身の我の眉間に
雪ふりしきる

ゆく春はしづかなれども氣にかかるあはれを
とめて我は來にけり

春がすみとほくながるる西空に入日おほきく
なりにけるかも

みちのくに米とぼしとぞ小夜ふけし電車のな
かに父をしぞ思ふ

しんしんと雪ふるなかにたたずめる馬の眼は
またたきにけり

電車とまるここは青山三丁目染屋の紺に雪ふ
り消居り

3 雑歌

むかう空にながれて落つる星のあり悲しめる
身の命のこぼれ

赤電車場ずゑをさして走りたりわれの向ひの
人はねむりぬ

ゆらゆらと朝日子あかくひむがしの海に生れてゐたりけるかも

東海の渚に立てば朝日子はわがをとめごの額を照らす

目をひらきてありがたきかなやくれなゐの大日われに近づきのぼる

ともしびの心をほそめて松はらのしづかなる
家にまなこつむりぬ。

目をとぢて二人さびしくかうかうと行く松風
の音をこそ聞け

松ばらにふたり、目ざめて鳥がなく東土の海の
あけぼのを見つ

松風が吹きゐたりけり松はらの小道をのぼり
童女と行けば

ほのぼのと諸國修行に行くこころ遠松かせも
聞くべかりけり

父母所生の眼ひらきて一いろの暗きを見たり
遠き松かせ

2 一心敬禮

海岸の松の木原に著きしかば今日のひと日も
暮れにけるかも

潮騷をききてしづかに眠らむと思ひやまねば
つひに來にけり

七面鳥の腹へりしかばたわやめは青菜をもちてこまごまと切る

七面鳥ねむりに行きて残り立つゆづり葉の莖の紅きがかなし

ゆづり葉のもとにひとむらの雪きえのこり七面鳥は寝にゆきにけり

七面鳥ふたつい竝びふくれたち息凝らす我に
近づきにけり

あかねさす日もすがら見れど雌鳥の七面鳥は
しづけきものを

七面鳥かうべをのべてけたたまし一つの息の
聲吐きにけり

七面鳥ひとつひたぶるに膨れつつ我のまとも
に居たるたまゆら

まかがよふ光のなかに首あげ七面鳥は身ぶる
ひをせり

ひばの木の下枝にのぼるをんどりの七面鳥の
かうべ紅しも

垂氷(たるひ)より光(ひかり)のかたまり落(お)ちて來(く)る七面鳥(しちめんてう)は未(いま)
だつるまず

うちひびき七面鳥(しちめんてう)のをんどりの羽(は)ばたき一(ひと)つ
大(おほ)きかりけり

十方(じつぱう)に眞(まつ)ひるまなれ七面(しちめん)の鳥(とり)はじけむばかり
膨(ふく)れけるかも

穏田の繪かきの庭に歩み居る七面鳥をわれも
見て居り

ひさしより短か垂氷の一ならび白きひかりが
滴つてゐる

ゆづり葉の木かげ斜にをんどりの七面鳥は急
ぎあゆめり

1 七面鳥

冬庭に百日紅の木ほそり立ち七面鳥のつがひ
あゆめり

穏田にいへゐる繪かき繪をかくと七面鳥を見
らく飽かなく

大正三年

水のへの光たむろに小蜻蛉はひたぶるにして飛びやますけり

くれなゐの蜻蛉ひかりて飛びみだるうづまきを見れどいまだ飽かずも

お茶の水を渡らむとして蜻蛉らのざつくばらんの飛びおこなひ見つつかなしむ

7 お茶の水

まかがよふひかりたむろに蜻蛉らがほしいま
まなる飛のさやけさ

あか蜻蛉むらがり飛ぶよ入つ日の光につるみ
みだれて來もよ

こころむなしくここに來れりあはれあはれ土
の窪にくまなき光

秋づける代々木の原の日のにほひ馬は遠くも
なりにけるかも

かなしみて心和ぎ來むえにしあり通りすがひ
し農夫妻はや

15

野のなかにかがやきて一本の道は見ゆここに命をおとしかねつも

はるばると一すぢのみち見はるかす我は女犯をおもはざりけり

我はこころ極まりて來し日に照りて一筋みちのとほるは何ぞも

6 一本道

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我
が命なりけり

かがやけるひとすぢの道遥けくてかうかうと
風は吹きゆきにけり

むらがりて豚の子走る畑みちにすでに衰ふる
黄いろの日のひかり

むらぎものみだれし心澄みゆかむ豚の子を道
にいぢめ居たれば

みちたらはざる心をもちて湯のたぎり見つめ
けるかな宿直をしつつ

5 宿直の日

狂院のうらの畑の玉キャベツ豚の子どもは越
えがたきかな

かんかんと眞日照りつくる畑みちに豚の子の
むれをしばしいぢめぬ

ひたぶるにトマト畑を飛びこゆるわれの心の
いきどほろしも

いちはやく湧くにやあらむこの身さへ懺悔の
心わくにやあらむ

くろがねの黒きひかりを、おもひつつ乾くさの
へに目をつむり居り

4 乾草

きなぐさきあまつひかりに濡れとほり原のくぼみをあれひとりゆく

ふりそそぐ秋のひかりに乾くさのこらへかねたるにほひのぼれり

ひしひしと力たへがたく湧きたちて遠き女を
ねたみけるかも

海岸にくやしき息を漏したり常ならぬかなや
荒磯潮間

われつひに孤り心に生きざるか少女に離れて
さびしきものを

り

太陽のひかり散りたりわが命たじろがめやも
野中に立ちて

くろぐろと晝のこほろぎ飛び跳ねてわれは涙
を落すなりけり

あしびきの山より下る水たぎち二たびここに
相見つるかも

3 野中

たかだかと乾草ぐるま竝びたり乾くさの香を
欲しけるかも

ほしくさの馬車なみ行きしかば馬はかくろふ
乾くさのかげ

6

うつし身のわが荒魂も一いろに悲しみにつつ潮間をあゆむ

わがこころせつぽつまりて手のひらの黒き河豚の子つひに殺したり

河豚の子をにぎりつぶして潮もぐり悲しき息をこらす吾はや

ぬば玉の黒き河豚の子なびき藻に少女の如く
ひそみたりけり
よひあさく土よりのぼる土の香を嗅ぎつつ心
いきどほり居り
郊外をか往きかく往き坂のぼり黄いろき茸ふ
みにじりたり
5

わが妻に觸らむとせし生ものの彼のいのちの
死せざらめやも

固腹をづぶりと刺して逃げのびし男捕はれて
來るとふ朝や　　岡田滿

いきどほろしきこの身もつひに默しつゝ入日
のなかに無花果を食む

2

折にふれ

をさな妻あやぶみまもる心さへ今ははかなく
なりにけるかも

3

どんよりと歩みきたりし後へより鐵のにほひ
ながれ來にけり

あかねさす晝のこほろぎおどろきてかくろひ
行くを見むとわがせし

畑ゆけばしんしんと光降りしきり黒き蟋蟀の
目のみえぬころ

まんじゆ沙華さけるを見つつ心さへつかれて
をかの畑こえにけり

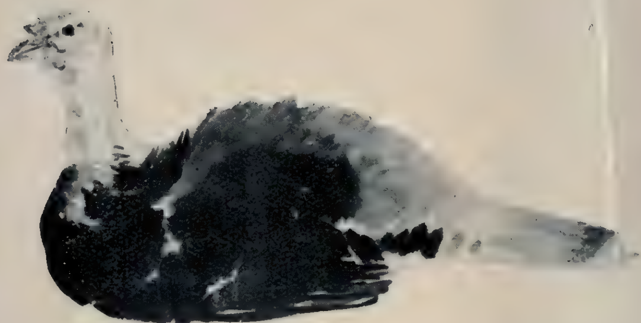
1 黒き蛼

ふり灑ぐあまつひかりに目の見えぬ黒き蛼を
追ひつめにけり

秋づける丘の畑くまに音たえて晝のいとどは
かくろひいそぐ

大正二年

九月より



挿繪目次

大正六年

大正五年

大正四年

大正三年

あらたま目次

大正二年

ふものに關係ない極く僅かの不易の歌とを、世に問ふに過ぎないのである。いろいろ苦勞して、留學から歸ると、周圍はすつかり變つてゐた。大正十二年の地震で春陽堂も印刷所も燒けてしまつて「あらたま」は無くなつてゐた。それから大正十三年十二月廿八日の夜半に失火して、僕の住ひも僕のものも盡く燒けはててゐた　僕は茫然として、せん術を知らずに日を送つた。しかしこのたび「あらたま」も二たび世に出るやうになつた。それを僕はかたじけないとおもふ。僕は、無常の現世に、正しき人間の道を行かねばならぬ。神々よ、僕をまもりたまへ。大正十四年二月十四日よる。齋藤茂吉

「あらたま」第八版にのぞみて

第八版の校正は、悲しく、いらいらした生活のうちにやうやく濟んだ。口繪の「七面鳥」は第八版に際して、百穗畫伯よりの賜物である。第一版のときは、自分の歌に强い不滿があつても、それでも、新たに自分の歌集が世に出るのであるから、校正するにも、おのづと心の競ひがあつた。今度はそれとは趣がちがふ。實に久しぶりで、自分の歌を讀むと、どうも自分のものでないやうなものが、幾つもあつた。けれども、氣を出來るだけ靜めて校正につとめてゐるあひだに、やうやく自分の歌に親しみが出て來て、やはり自分のものであつたといふ氣がしたりした。しかし全體としては、みんな古い作ばかりである。僕は、短歌の歷史から見て興味ある幾つかの歌と、さうい

齋藤茂吉著

アララギ叢書第十編

あらたま

東京　春陽堂發行

